

<エッセイ>

スリランカ紅茶農園の長屋とその住まい像の形成

前田昌弘

19世紀後半、スリランカではさび病によるコーヒー樹木の壊滅により、コーヒーに代わる産業として紅茶が導入された。茶葉の摘み取りから紅茶の加工まで年間を通して人手が必要となり、紅茶プランテーションで働く労働者を募ることとなった。その際に南インドから移民してきたタミル人は、スリランカの紅茶農園の重要な担い手となったが、1948年のスリランカのイギリスからの独立を機に、社会的、政治的、そして経済的な困難と直面することになった。紅茶農園で働くために移民した人々の多くは、紅茶産業に従事しなくなったあとも労働者長屋に住み続ける場合がある。紅茶農園のタミル人の住む長屋の成立と、その後の状況について、筆者は「旧紅茶プランテーション農園に生きるタミルの人々と住まい」(2020)という論考で報告した。以下はタミル人の住む労働者長屋について、いくつかの視点から再考するものである。

1. 建築計画の仕様にみる長屋の住まい像

紅茶農園の長屋は、一室もしくは二室の狭小な住戸が線状に並ぶ形状であることから現地では「ラインハウス」(line house)、「ラインルーム」(line room)あるいは単に「ライン」(タミル語で「ラヤム」と呼ばれる。10ft×12ft(約 3m×3.6m)ほどの大きさの住戸に一家族が住まい、植民地時代には「クーリーライン」(Coolie Line)とも呼ばれていた。「クーリー」(Coolie)とは、過酷な労働と搾取労働に従事する労働者という意味であり、農園で働く人びとも植民地時代はそのような名称で呼ばれていた¹。

農園内の住まいを含む各種施設の計画は農園主の裁量によって決定されていたためか、統一の基準のようなものは管見の限り見当たらない。ただし、プランター向けのマニュアルが民間で出版されており、これらが実際の農園の計画においても参照されていた形跡があることから、ある程度の基準とともに、長屋の住まいに具体像を与えていたと推測される²。筆者がセイロン紅茶博物館の資料室で収集したマニユ

アルによると、農園の計画は労働者の適切な管理および生産の効率化を最大の目的としており、そのことは生産体制と空間・組織の結合を意味する「自己完結的な単位としての農園」(E.C.Elliott & F.J.Whitehead 1931)や、労働者の衛生環境への配慮を意味する「健全な長屋」(R.Garnier 1919)といった表現にも表れている。

マニュアルにはさらに、設計例の図面とともに長屋の仕様についての具体的な記載がある。共通の記載事項として、高地特有の条件(傾斜地、強風、寒冷な気候)を考慮した、敷地選定の考え方や住棟配置(敷地内での建物の向き、建物同士の間隔等)、建物の構造・材料の選択(分厚い石造りの外壁、トタン製の屋根材など)、部屋の寸法(10ft×12ft もしくは 12ft×12ft)、ベランダ空間(室内への雨風や湿気の侵入を防ぐ半屋外空間)を設ける必要性、換気・排水のための設備(換気口、舗装)といった内容がみられる(E.C.Elliott & F.J.Whitehead 1931, R.Garnier 1919)。

また、長屋の維持管理、手入れについての細かな記載もみられ、シロアリ対策として柱・扉の塗装、年 2 回程度の漆喰壁の塗り直しを行うこと、長屋周辺の清潔保持のため清掃員を雇い毎日清掃すること、土壌を強固に保つため長屋の近傍での耕作や家畜小屋の建設を禁止すること、土壌を汚染から守り伝染病を予防するためのトイレの設置基準と清潔保持の必要性といったことが指示されている(R.Garnier 1919)。

農園主の住まいである「バンガロー」と呼ばれる庭付きの邸宅についてはマニュアルにごく簡単な記載しかみられないが、労働者の住まいである長屋の建物とその維持管理については上述した通り多岐に渡って細かな指示が記載されている。たしかに 1880 年代の長屋に関する調査では、長屋の劣悪な居住環境や管理状態が報告されている³。しかし、マニュアルからは、あくまで農園主の立場からみた管理対象としてではあるが、労働者の住環境の維持に対して少なくとも建設当初はかなり気を配っていたことが窺える。

2. 改善・解消の対象としての長屋

現在、紅茶農園を管轄する省庁および紅茶農園コミュニティの社会開発を推進する NGO/NPO の言説から、以下で述べるように、彼らにとって長屋はあくまで、紅茶産業の持続的発展のために改善・解消すべき対象であることが読み取れる。くわえて、そのような考えは、長屋が物理的に劣悪な環境であるというだけではなく、尊厳

が欠如した非人間的な空間であるという住まい像に根ざしている。

農園インフラ開発庁が国連開発計画(UNDP)の支援を受けて2006年に作成した行動計画(NPA 2006-2010)では、長屋は「人間の居住に適さない、非常に老朽化したストック」と表現されている(Ministry of Nation Building and Estate Infrastructure Development 2006, p.ix)。その後、長屋の代替となる住宅の供給計画は、目標がほとんど達成されないまま、次々と新たな計画が打ち出され、それらの計画でも長屋が「不適切」であり「誇りが欠如した」住居であるという表現が繰り返されている(Jegathesan2018, pp.58-59)。2016年に発表された行動計画(NPA 2016-2020)においても「(長屋は)この国で最も貧しく、雨風からかろうじて身を守れる程度の住居」(Ministry of Hill Country New Villages, Infrastructure and Community Development 2016, p.54)といった表現がなされている。

また、スリランカの独立系シンクタンクである貧困分析センター(CEPA)は、スリランカの紅茶産業150周年に際して、紅茶農園の長屋を指して「(ここは単なる家屋であって)家ではない」(This house is not a home)という見解を公式に表明している(CEPA2017)。紅茶農園の労働者の多くが一度も自分の名前の住所に住んだことさえないことを引き合いに出し、紅茶農園の社会開発に対する政府の怠慢を糾弾している。CEPAは、農園を管轄する省庁とは異なり、紅茶産業の持続的発展や利潤の確保ではなく、あくまで労働者の尊厳や権利を守ろうとする立場にある。しかし、長屋については省庁と同様に、非人間的で尊厳を欠いた住まいというイメージを抱かせている。

長屋へのこういった眼差しは、紅茶農園の社会開発に関わる人びとの間では常識的なものなのかもしれない。M・ジェガセサンは、彼女自身はその発言を受け入れがたいとしつつも、彼女の知人で農園の社会開発に関わる地元NGO職員による以下の発言を紹介している。「ラインルームはまるで刑務所だ！そこから抜け出して初めて、そこで暮らすことのデメリットに気づくんだ。社会的にも、精神的にも、肉体的にも成長できない。誰かを住まわせることはできるが、長屋は人が成長できる空間ではなく、単なる施設だ。」(Jegathesan2019, p.99)

3. 人びとと共にある存在としての長屋

一方で、住み手自身による長屋の改善とその意味に着目した言説がみられる。これらは長屋における生命や人間的空間の存在を肯定する。さらに、農園労働者が背負ってきた複雑な歴史を反映し、その不安定さ、不均一さこそが本質であり、常に矛盾や葛藤とともにある存在であるという長屋の住まい像を提示している。

N・グーネティレックらは、住民の自助努力によって農園の長屋の狭さや設備の不備等が改善されている実態を報告している。くわえて、政府や農園主が問題に無関心であり、長屋の改善が住民任せになってきた経緯から、住民はより良い住宅や土地所有へのアクセスを農園管理者に対して主張する権利を持つと感じているということを描いている(Gunetilleke et al 2018, p.41)。そして、長屋という存在について、「経済効率と労働者の権利という二極間の緊張が特に顕著に現れるのが住宅である。経営者にとって労働者と長屋は生産手段、労働者にとって長屋と農園は「家」であり「村」である。どちらの立場も正当であるが矛盾している。」(Gunetilleke et al 2018, pp.51-53)と総括し、長屋の両義性とそれゆえの矛盾や葛藤を描いている。

また、M・ジェガセサンは、紅茶農園のタミル人たちが自分たちの「家」だと捉えている長屋に投資し空間を改修する行為に焦点を当て、紅茶農園の人たちはスリランカの土地に帰属意識を持たないという、これまでの通説に対する反証を試みている。彼女にとって長屋は「農園のタミル人労働者が社会から疎外され土地を持たないという不均等さを示す物質的証拠」(Jegathesan2019, p.102)である。そして、長屋の壁のひび割れや何世代にも渡る補修の跡は、住人たちによる長屋への投資と価値づけを示す物質的な「アッサンブラージュ」であり「アーカイブ」であるという(Jegathesan2019, pp.115-116)。長屋の住人は家で儀式を行い、食事を準備し、共に食す。長屋の生活は常に不安定、不均一なものである。しかし、そのような流動的な構造は、社会からの疎外を示すとともに、紅茶農園と長屋におけるつながりの兆候でもあるのだ(Jegathesan2019, pp.116)。

この点について D・バスもまた、スリランカにおけるエスニシティに関する支配的言説との相互作用を通じて農園のタミル人のエスニシティが発展してきたという事実を強調している。そして、どれほど限定的であったとしても農園のタミル人とより広い世界とのつながりを注視することが、「牢獄」や「飛び地」といった紅茶農園のステレオタ

イブに抵抗し、そこから脱却するうえで欠かせないと主張している(Bass2013, p.44)。

M・ジェガセサンやD・バスは、長屋における生命、人間的空間、外部とのつながりの存在を肯定し、タミル文化において主体と人格に関わる概念である「ウル」(ūr)が農園にも存在すると主張する。彼女らの主張は、政治的な意味合いを含む。M・ジェガセサンは、何世代にも渡り長屋に住み、長屋に投資してきた紅茶農園の人たちに対し、政府や援助関係者が「ここは家ではない」と言うことに疑問を抱き、その意味を問いただしている。農園に「ウル」が存在するという彼女らの主張は、紅茶農園のタミル人の労働搾取と引き換えに繁栄してきたスリランカ社会に対してマイノリティの存在を可視化するのである(Jegathesan2019, pp.124)。

4. 身体の拡張としての住まい:ウルの概念

タミル語の「ウル」(ūr)は、家(home)、村(village)、故郷(home town)等と訳されることがあるが、文脈によってその指し示す内容は異なり、単なる空間にとどまらず、より複雑な意味体系や社会的地位に関わる概念であると言われる。

スリランカ南部出身のタミル人の人類学者 E・V・ダニエルは、ウルとは、①その土壌のサブスタンスを共有すると信じている人間が住む領域であり、②タミル人がそれを認知することで自分自身を方向づけることができる領域であると説明している(Daniel1984, p.63)。タミル文化においてウルは常に文脈で理解される。それも人生や家族といった人間的文脈だけでなく、家屋、土壌、水、食物といった非人間的文脈においても理解される。「人は、村の畑で育った食物を食べ、村の井戸に湧き出る水を飲むことによって、土の性質を吸収する。村の人びとはウルに住むだけでなく、食べ物の残り滓、身体の排泄物、火葬・埋葬された遺体など、ウルの土と混ざり合うことによってウルのサブスタンスに影響を与える」(Daniel1984, pp.84-85)。ウルとは、人間と非人間が混濁しながら人と土地の性質を相互に形作っていくことであらわれる「流動的なしるし」(fluid sign)である。

E・V・ダニエルの「囲い込むウル」と対比し、D・P・マインズは、カースト、共同体、権力の境界を超えて構成されるウルのあり方を「開示するウル」と呼んだ。ウルは「移動する言説」(motile discourse) (Mines2008, p.200)であり、人とウルは土壌のサブスタンスを共有しており、それは単なる比喻ではなく実質的なやりとりである(Mines

2008, pp.203-204)。ウルスの概念と実体はこの他にも具体的な状況を通じて検討され、「理想化されたウル」(Thiranagama2013)、「場所の名付けとウル」(Bass2013)、「ウルスの記憶・感情への愛着」(Chattoraj2018)等、その理解は拡張され続けている。このような、ウルを取り上げる多様な文脈や意味の理解は、それ自体がウルスの特性を表している。すなわち、ある性質をもつ土地との関わりが常に人の知性や存在そのものとして解釈されるという特性である。このような同一視は、人と土地のみならず、畑、寺院、家、親族、家族へと広がっており(Mines2008, pp.202-203)、ウルはそれらが表裏一体となっているからこそ、絶対的な境界をもたず、自我との関連から一人称で定義される(Daniel1984, pp.70-71)。それゆえに、「あなたのウルは何ですか？」(What is your ūr?)という質問は、タミル人にとって自己開示に関わる重大な意味合いを持つ(Daniel1984, pp.102, Jegathesan2019, p.101)。このような、ウルという概念を通して見えてくるのは、タミル文化の「人物中心志向」であり、その根底にはヒンドゥー教の現実感が関係しているとも言われる(Daniel1984, pp.70-72)。土壌のサブスタンスとの混合に人それぞれ独自の比率や適度なバランスがあり、それゆえにウルは常に特異であり、移り変わりの激しいものとなっている。

5. 長屋の手入れを通じたウルスの生成

筆者がフィールドとしており、論考(前田 2020)でも取り上げた旧紅茶農園・パウラナ村の長屋の建物の仕上げのうち、自然材料によるものは頻繁に手入れがなされている。住民の話によると、漆喰塗りの壁は数ヶ月から半年に一度、また、牛糞を混ぜた土間は1週間に一度の頻度で塗り直されている。特に、牛糞を混ぜた土間の塗り直しが高い頻度で行われているのは、頻繁な手入れがなければ長持ちさせることが難しい材料であるということもあるが、ヒンドゥー教を信仰する住民にとって牛は神聖な存在であり、牛糞をつかった土間を塗りなおすという行為が儀礼化しているためであると考えられる。

寺院や祠等の宗教関連の施設は紅茶農園では数少ない、農園主ではなく労働者の管理下に置かれた場所であった。タミル文化において神々の力は大地そのものに宿っていると言われる(Mines2008, p.204)。礼拝や祭礼は労働者たちにとって癒やしであり、彼らが農園の土地の神々を祀り祠や寺院を維持する慣習が多くの研究者

によって記録されてきた(Hollup1994, Daniel1996, Bass2013)。

パウラーナ村では火曜日と金曜日に村内の寺院や祠に礼拝する住民が多い(ヒンドゥー教では曜日によって礼拝する神々が異なる)。礼拝に先立ち身体を沐浴などで清めるのにあわせ、牛糞を混ぜた土間や壁も塗り直す。長屋の住人はバケツに牛糞と粘土と水を入れて練り、それを素手や布で土間の床の上に塗り重ねる。

また、かまどがある場合、台所の空間の仕上げが土間や土壁の仕上げのまま残される傾向がある。これには、かまどで薪を使って調理すると内装が煙や煤で汚れ、特にタイルやペイント等の工業製品による内装では汚れが目立ちやすく、メンテナンスの費用も高くつくという理由が考えられる。しかし、それだけではなく、土間や壁の塗り直しの理由と同様に、ヒンドゥー教において神聖な場所である台所の空間を定期的な塗り直しによって清浄な状態で保持するという意味合いもあると考えられる。

かつて、牛糞を混ぜた土間や壁は、長屋の劣悪な住環境の一因であると報告されていた⁴。しかし、村の人びとにとって牛は家畜であり、神聖な存在でもある。牛の糞は畑で肥料としても用いられ、牛乳や畑で採れた野菜は栄養源となり住人の身体を形作る。また、長屋の人びとは牛糞等を材料として長屋の空間を手入れしており、それは彼らの生存空間を維持する行為であると同時に、儀礼上の意味合いを含み、彼らの信仰に根ざした生活を構成している。

また、長屋とその周辺では、家や畑、家畜小屋の入り口、台所、洗い場などに何らかの結界を示すし(藁などの植物を乾かして結んだものや動物の骨等)が掲げられている。ヒンドゥー教の神々は土地だけでなく、人や家屋にも宿ると言われる。そして、先に述べたように人、家、土地、家族、親族の表裏一体の関係であった。したがって、神々もまたそれらの連鎖のすべてに宿る(Mines2008, pp.205-206)。これらのしるしは、人、土地、神が相互に規定しあい、住人の身体を形づくる材料が循環することで、住人の身体を周囲の環境へと拡張していることを示唆している。

紅茶農園における労働者長屋の住まい像はこれまで、狭小な空間、物理的環境の劣悪さから尊厳と人間性を著しく欠いた住まいとして主に政府・援助関係者から一方的に語られてきた。しかし、長屋に自ら手を加える人びとの実践やタミル人にとっての「ウル」の概念を踏まえると、紅茶農園に暮らすタミル人にとって、住まいは単なる空間や物理的環境にとどまらず、自己、家、共同体といった多様な意味を含む。バ

ウラーナ村の長屋の住まいについても、こういった観点から捉え直したとき、多様な意味を含む住まい像と実体としての空間が長屋の手入れという実践を通じて結びついており、そこには確かに「ウル」が生成されている。

¹ 「クーリー」の語源には諸説あり、「苦力=つらい労働」(中国語)、「奴隸」(ウルドゥ語)、「クーリー族の人=略奪や泥棒を意味する」(グジャラート語)、「下働きの対価=墮落、悪漢の部族を意味する」(タミル語)といった諸言語との関連も指摘されている(池本 1992、p.331)。スリランカにおいてもクーリーは「産業労働市場の最下層の一員」であり、植民地において「飼いならされるべき」「獣」として差別された商品であるとみなされてきた(Jegathesan2019, pp.11-12)。

² 1920~30年代に出版されたマニュアルでは「政府の基準」(E.C.Elliott & F.J.Whitehead 1931)や「政府標準の労働者長屋」(Nicholas1926)といった記述があり、この頃には何らかの統一的な基準が政府から出されていたことが窺えるが、この基準が具体的に何を指すのかは不明であった。

³ ウェスムペルマは、政府が任命した監督医務官による紅茶農園の衛生検査(1983-1986年に実施)における長屋の状態についての記述を紹介している。それによると、農園主から提供される住居の常態は健康的な生活には到底満足できるものではなく、排水、換気、プライバシーといった条件にほぼ無配慮であり、室内の床は泥と牛糞の混合物で固められており、農園の湿潤な気候に不適切であった。大多数の長屋で清掃が疎かにされ衛生状態が悪く、ベランダでは家畜が飼われていたという(Wesumperuma1986, p.232)。

⁴ 注3参照

<参考文献>

- Bass, D. *Everyday Ethnicity in Sri Lanka: Up-country Tamil identity politics*, Routledge, 2013.
- CEPA (Centre for Policy Alternatives). *This House Is Not a Home: The Struggle for Addresses and Land in the Estate Sector*, August 17, 2017.
- Chattoraj, D. *Narratives of Sri Lankan Displaced Tamils Living in Welfare Centres in Jaffna, Sri Lanka*, *Journal of Maritime Studies and National Integration*, vol.2, no.2, pp.67-74, 2018.
- Daniel, E.V. *Fluid signs: being a person the Tamil way*, Univ. of California Pr., 1984.
- Daniel, E.V. *Charred Lullabies: Chapters in an Anthropography of Violence*, Princeton Univ. Pr., 1996
- Elliott, E.C. & Whitehead, F.J. *Tea Planting in Ceylon*, Second Edition, the Times of Ceylon Co., Ltd, 1931.
- Garnier, R. *Ceylon Rubber Plantation Manual*, the Times of Ceylon Co., Ltd, 1919.
- Gunetilleke, N., Kuruppu, S., Goonasekera, S. *The Estate Workers' Dilemma: Tensions and Changes in the Tea and Rubber Plantations in Sri Lanka*, CEPA (Centre For Poverty Analysis), 2008.
- Hollup, O. *Bonded Labour : Caste and Cultural Identity Among Tamil Plantation Workers in Sri Lanka*, Sterling Pub Private Ltd, 1994.
- Jegathesan, M. *Tea and Solidarity: Tamil Women and Work in Postwar Sri Lanka*, Univ. of Washington Pr., 2019.
- Jegathesan, M. *Claiming Ūr: Home, Investment, and Decolonial Desires on Sri Lanka's Tea Plantations*, *Anthropological Quarterly*, Vol.91, No.2, pp.635-670, 2018.
- Mines, D. *Waiting for Vellāḷkantaṇ*: Narrative, Movement, and Making Place in a Tamil Village. in *Tamil Geographies: Cultural Constructions of Space and Place in South India*, edited by Martha Anna Selby and Indira Viswanathan Peterson, pp.199–220, Oxford Univ. Pr., 2008.
- Ministry of Hill Country New Villages, Infrastructure and Community Development. *National Plan of Action for the Social Development of the Plantation Community 2016-2020*, 2016.
- Ministry of Nation Building and Estate Infrastructure Development. *National Plan of Action for the Social Development of the Plantation Community, 2006-2015*, Government of Sri Lanka, 2006.
- Thiranagama, S. *In my mother's house: civil war in Sri Lanka*, Univ. of Pennsylvania Pr., 2013.
- Wesumperuma, D. *Indian Immigrant Plantation Workers in Sri Lanka: A Historical Perspective, 1880-1910*, Vidyalandara Pr., 1986.

池本幸三:近代世界における労働と移住の概観ー労働力の世界市場の形成過程を中心として,
池本幸三編『近代世界における労働と移住ー理論と歴史の対話』,阿吽社, pp.311-374,
1992年

前田昌弘:旧紅茶プランテーション農園に生きるタミルの人々と住まいー労働者長屋の成立と
物理的実態について,『カルチュラル・グリーン』第1号, pp.1-24, 2020年